

## 週刊 瀬上方言

黒木 邦彦

蜷池言語研究所所長・甲南女子大学講師

ふと思い立って、鹿児島県上甕島瀬上<sup>かみこしきしませがみ</sup>の伝統方言の教科書を週刊で書いていくことにしました ([注] 2012年8月29日現在)。瀬上方言というのは、僕が時々Facebookに平仮名書きで投稿しているアレです。

なお、『週刊 瀬上方言』は「創刊号無料 (通常無料)」, つまり, 常に無料です (デアゴ○ティ〜ニ♪ (泣))

### 1 上甕島瀬上 (2012年8月29日執筆; 同年9月10日改訂)



図1 甕島列島

上甕島は串木野新港<sup>くしきのしんこう</sup> (鹿児島いちき串木野市) の西方約 38km の東シナ海上に浮かぶ離島で、中甕島<sup>なかこしきしま</sup>や下甕島<sup>しもこしきしま</sup>などと甕島列島を形成しています。

瀬上 (現地では [セッガーミ; seŋa:mʲi]<sup>1</sup>) は鹿児島県薩摩川内市上甕町 (旧同県薩摩郡上甕村)<sup>おおあざ</sup>の大字の一つで、2011年度の国勢調査によれば、当地の人口は212人です。1950年代には1,000人近くの人が当地で暮らしていたそうなので、相当な減りようです。

瀬上は、一見すると、どこにでもありそうな集落ですが、当地の方言は強烈です。このことは、‘黒砂糖’ ‘桜島’ ‘板敷き’ ‘漕いだ’ をそれぞれ次のように言うことから分かるでしょう:

- (1) a. [クヨニャロー; kujonaro:] ‘黒砂糖’
- b. [サグヤニマ; sagujanima] ‘桜島’
- c. [イラニーギ; irani:gi] ‘板敷き’
- d. [ケーナ; ke:na] ‘漕いだ’

<sup>1</sup> 最も近い音声をカタカナと国際音声字母 (IPA) で [ ] 内に書き表します。

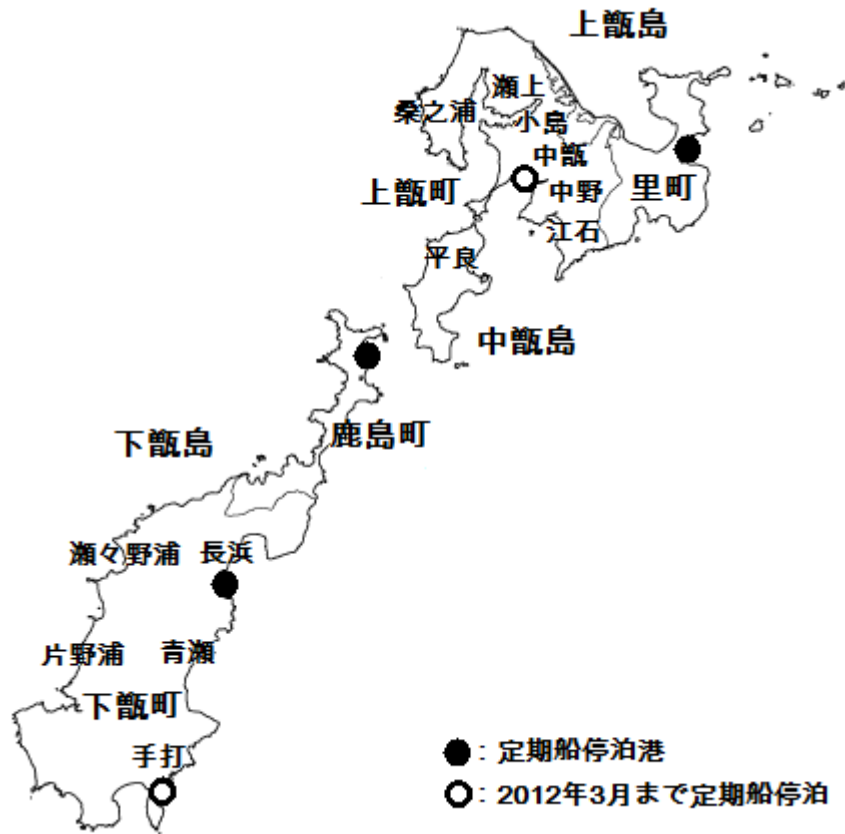


図2 甌島列島



図3 下甌手打診療所  
(黒木撮影)

【余談】

下甌島には、『Dr. コトー診療所』のモデルとなった、下甌<sup>てうち</sup>手打診療所 (cf. 図3) があります。

瀬上方言も日本語の一種なのですが、上記のように、標準日本語とは音声の面でかけ離れています。そのため、初見 (言語だから初聞?) ではまず分かりません。鹿児島方言の中では最も難しく、本土方言の中でも、津軽方言と一、二を争うのではないかと思います。

土地の人々と伝統方言でペラペラ喋れたら素敵なんですけど、現時点では、会話を半分くらい聴き取るのがやっとです。

話者数が限られている伝統方言は、コミュニケーションの道具として活躍する機会が限られています。この面では英語などには遠く及びません。したがって、伝統方言の教科書を作っても、需要はほとんどないでしょう。

表 1 甑島列島の人口 (町別, 大字別; 2011 年)

里町	里							
1,314	1,314							
上甑町	中甑	中野	江石	平良	小島	瀬上	桑之浦	
1,532	547	53	175	309	172	212	64	
鹿島町	藺牟田							
517	517							
下甑町	手打	片野浦	瀬々野浦	青瀬	長浜			
2,298	790	167	205	229	907			

それでも瀬上方言の教科書を作るのは、言語という無形文化を一つでも多く記録・保存するためです。残念なことに、瀬上方言も他所の伝統方言と同じく、消滅の危機にあります。僕が知る限り、50代の方々も結構話せますが、80代の方々に比べると、やはり相当に共通語化しています。母語話者がいなくなった言語の再生は困難を極めるので、危機言語の記録・保存は母語話者が健在であるうちに終えなければいけません。

危機言語の記録・保存は、「人間の寿命を延ばす」だとか、「アフリカ大陸の砂漠を緑化する」だとか、「経済を好転させて、新たに雇用を生む」だとかには貢献しません (笑) 「人間の所産である文化を人様に迷惑を掛けない範囲で継承していくことは、絶対的に善である」という前提でこの仕事に取り組んでいることを、どうかご理解下さい。

幸い、今は僕のような庶民でも、インターネットを通じて、全世界に情報を発信できます。これを活用して、瀬上方言 (更には甑島列島) の存在を広めることができれば、この上なく幸せです。来月 ([注] 2012年8月29日現在) から週刊で進めていきます。

なお、作成にあたっては、次の文献に多くを学んでいます。黒木も、2010年9月以来、半年に一度の頻度で現地に足を運んで、母方言話者の方々に教わっています (自分の論文も書かないといけませんね):

### 参考文献

- [1] 上村 孝二 (1965) 「上甑島瀬上方言の研究」, 『鹿児島大学法文学部紀要文学科論集』1, pp. 21-49, 鹿児島大学法文学部
- [2] 南 不二男 (1967) 「鹿児島県甑島瀬上方言の音韻体系」, 『方言研究年報』10, pp. 1-17, 広島大学方言研究会

- [3] 尾形 佳助 (1987a)「上甕島瀬上方言の形態音韻論」, 九州大学大学院人文科学府・昭和 62 年度修士論文, 未公刊
- [4] 尾形 佳助 (1987b)「上甕瀬上方言の子音体系」, 『九州大学言語学研究室報告』 8, 九州大学文学部
- [5] 尾形 佳助 (1988a)「上甕瀬上方言の人称代名詞」, 『九州大学言語学研究室報告』 9, 九州大学文学部
- [6] 尾形 佳助 (1988b)「上甕瀬上方言の音韻の記述」, 『日本方言研究会 第 46 回研究発表会発表原稿集 (於国学院大学)』, pp. 46–54, 日本方言研究会
- [7] 木部 暢子 (2001a)「甕島方言の音声の特徴について—概説と語彙資料集—」, 真田信治 (編) 『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』 (「環太平洋の言語」成果報告書 A4-001), pp. 125–79, 大阪学院大学情報学部

話者の生年や社会状況が異なることもあって, [1, 2] の資料は, [3] 以降の資料 (僕が現地調査で得た資料も含む) よりも瀬上方言の古態を留めている。よって, 前者でしか確認できない資料には ¥ を付します。

## 2 音韻論

先日 ([注] 2012 年 9 月 10 日現在), 瀬上方言の音声は標準日本語のそれとかけ離れていると言いましたが, それは言語形式の音形<sup>2</sup>に限ってのことです。瀬上方言で発する音声は, 日本語母語話者が日常的に発しているものとあまり変わりません。音声の組合せも標準日本語に似ているので, 音声を書き写すだけであれば, 仮名でも事足ります。

しかし, 瀬上方言の音声を体系的に学ぶのであれば, この方法は望ましくありません。瀬上方言では, 語の音形が一定の規則に従って様々に変化するので, その一つ一つを暗記するよりも, 音声の体系 (専門的には“音韻”と言います) を理解する方が効率的なのです。

そこで, 本稿ではローマ字を使いながら, 瀬上方言の音韻を勉強していきます。日本語母語話者には抵抗があるかと思いますが, どうぞ宜しくお付き合い下さい (以降は常体で書いていきます)。

### 2.1 音節構造 (2012 年 9 月 21 日執筆)

瀬上方言の語 (word)<sup>3</sup>の音声配列を分析すると, 次のことに気づく:

---

<sup>2</sup> 言語形式と認められる音声配列のこと。‘tree’ ‘leg’ ‘man’ を意味する言語形式の音形は, 標準日本語では [キ, アシ, アタマ] で, 瀬上方言では [キー, アーシ, アラマ]。

<sup>3</sup> 最小の自立形式。本稿では, 語と接語 (clitic) から成る, 次のような句 (phrase) も含める:

- (2) a. 次のように、子音 (略号: C) を含まない語はあるが、母音 (略号: V) を含まない語はない (∴語は 1 個以上の母音と 0 個以上の子音から成る):  
 [イ; i] ‘胃’, [オ; o] ‘緒’, [ウイ; ui] ‘瓜’, [オイ; oi] ‘私’<sup>4</sup>
- b. 次のように、母音で始まる語も子音で始まる語も適格である。
- i. [イン; in] ‘犬’, [ウラ; ura] ‘歌’, [ウラン; uran] ‘売らん’, [アッタ; atta] ‘有った’
- ii. [クエ; k<sup>w</sup>e] ‘食え’, [ジェン; dzen] ‘銭’, [ビンタ; b<sup>i</sup>inta] ‘頭’, [キモン; k<sup>i</sup>imon] ‘着物’
- c. 次のように、(i) 母音で終わる語も、(ii) 子音で終わる語も適格である。
- i. [ジョイ; dzoj] ‘草履’, [アニヤ; ana] ‘痣’, [スバ; suba] ‘唇’, [ワッコ; wakko] ‘お前 (対同年以下)’
- ii. [オン; on] ‘鬼’, [ウラン; uran] ‘売らん’, [コニン; konin] ‘来ずに’, [カンマン; kamman] ‘構わない’
- d. 次のように、母音連続 (長母音を含む。以下同様) で始まる語はあるが、子音連続 (長子音を含む。以下同様) で始まる語は少なく、次掲 (ii) のとおり、型も決まっている (ほとんどが長鼻音):
- i. [イーヨーユ; i:wo:ju] ‘言ってる (進行)’, [オーミ; o:m<sup>i</sup>] ‘海’, [アーギ; a:ŋ<sup>i</sup>] ‘顎’, [ウイ; ui] ‘瓜’, [オイ; oi] ‘私’
- ii. [ンメ; m:e] ‘梅’, [ンマ; m:a] ‘馬’, [ンマガ; m:aga] ‘旨い’, [ンダー, ンダー; nda:, n:da:] ‘私達は’, [ンノン; n::on] ‘私達’, [ンノゲ; n:ŋe] ‘私の家’
- e. 次のように、母音連続で終わる語はあるが、子音連続で終わる語はない:  
 [メーゲー; me:ŋe:] ‘眉毛’, ¥<sup>5</sup>[ダンポー; dampo:] ‘ランプ’, [ツイ; tsui] ‘釣り’, [トイ; toi] ‘鳥’, [サイ; sai] ‘しなさい’
- f. 子音間に生起しうる母音の最大数も、母音間に生起しうる子音の最大数も 2 である。
- g. 次のように、[VVC, VCC, CCVV] はあるが、[VVCC] はない。

(2) から分かるように、瀬上方言の語の音声配列は規則的である。これを記号化する

- 
- (I) a. [mu:ei:] ‘虫に’, [u:ei:] ‘白に’, [m<sup>i</sup>ise:] ‘店に’, [se:] ‘網糸に’, [kuea:] ‘草に’  
 b. [mu:ea:] ‘虫は’, [u:sa:] ‘白は’, [m<sup>i</sup>iea:] ‘店は’, [sa:] ‘網糸は’, [kusa:] ‘草は’

<sup>4</sup> 1 人称名詞はいずれも男女共用である。以下同様。

<sup>5</sup> 話者の生年や社会状況が異なることもあって、上村 (1965), 南 (1967) の資料は、尾形 (1987a) 以降の資料 (筆者が現地調査で得た資料も含む) よりも瀬上方言の古態を留めている。よって、上村 (1965), 南 (1967) でしか確認できない例には ¥ を付す。

と、次のとおり:

(3) [w {C}V{V/C}{C}V{V/C} ... {C}V{V/C}]

(注1) {X}: Xは任意の要素。

(注2) A/B: AないしB。

(3) から分かるように、瀬上方言では、[[C]V{V/C}] の繰り返しで語を作る。この音声群を音節と見なし、それぞれの要素を次のように名付ける (音節の境界は . で示す):

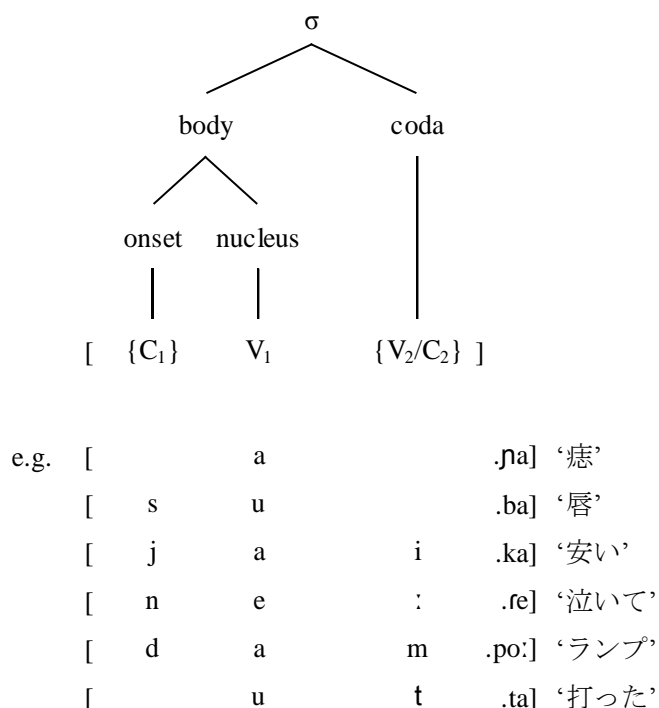


図4 瀬上方言の音節構造

## 2.2 音素目録

日本語母語話者が日常的に使っている仮名の多く (全てではない) は、2種類の音声を続けて発したものを表している。たとえば、「か」が表しているのは、カ行音 [k] に、ア段音 [a] を続けて発した [ka] である。前半 (=行の音) の [k] などを“子音”と、後半 (=段の音) の [a] などを“母音”と言う。

### 2.2.1 母音音素 (2012年9月10日執筆; 同年9月21日改訂)

瀬上方言では、標準日本語などと同様に、[i, u, e, o, a] という5種類の母音を使い分け

ている<sup>6</sup>。これらは nucleus ないし coda (cf. 図 4) になるが, [e, o] は次のように制限されている:

- (4) a. [e] で始まる音節 (= [e] という body) はない。これを期待する箇所は, 次のように, ことごとく [イエ; je] となっている:

[イエ; je] ‘家; 絵’, [イエナ; jena] ‘腕; 枝’, [フイエ; φuje] ‘笛’, [コイエ; koje] ‘声’, [イエンピツ; jemp<sup>h</sup>itsu] ‘鉛筆’

- b. [o] で始まる音節 (= [o] という body) は第 2 音節以降にはない。これを期待する箇所は, 次のように, ことごとく [ヲ; wo] となっている:

[イヲ; iwo] ‘魚’, [カヲ; kawo] ‘顔’, [シヲ; eiwo] ‘塩’, [トヲー; towo:] ‘遠く’, [トヲーユ; towo:ju] ‘通る’

(4) の [je, wo] は音声的には [CV] である。しかし, [e, o] とは対立していない (= 同環境に [e, o] は生起しない) ので, 音韻的には /V/ と解釈しても良い。

ちなみに, 最小対こそ見出せないが, 初頭音節での [o] vs. [wo] は弁別的である:

- (5) a. [オイ, \*ヲイ; oi, \*woi] ‘私’, [オーミ, \*ヲーミ; o:m<sup>i</sup>i, \*wo:m<sup>i</sup>i] ‘海’, [オース, \*ヲース; o:su, \*wo:su] ‘押す’ (cf. [イエーラ, \*ウエーラ; je:ra, \*we:ra] ‘押した’)
- b. [ヲーウ, \*オーウ; wo:u, \*o:u] ‘追う’ (cf. [ヲーラ, \*オーラ; wo:ra, \*o:ra] ‘追った’)

そこで, 本稿では次のように, [i, u, e, o, a] と (4) の [je, wo] を母音音素として解釈する:

- (6) 瀬上方言の母音音素: ●/i/ [i] ●/u/ [u] ●/e/ [e ~ je] ●/o/ [o ~ wo] ●/a/ [a]

(注 1) /A/ [B]: /A/ は [B] と発音する。

(注 2) /A/ [B ~ C]: /A/ は, 特定の環境では [B] と, その他の環境では [C] と発音する。

(注 3) [u, a] は正確には [ü, ä] であるが, 入力のを優先して, このように表記する。

舌の位置の違いに基づいて (6) を整理すると, 表 2 のようになる:

<sup>6</sup> [u, a] は正確には [ü, ä]。入力のを優先して, [u, a] と表記している。

日本語式に表現すれば, 母音の数は「段」(ア段, イ段, ウ段 etc.) の数と同じ。





素のそれに比べると、一定しない。このような事情はあるが、瀬上方言の子音音素の数<sup>7</sup>は標準日本語のそれとほとんど同じである。先行研究の記述と筆者の調査結果を踏まえると、瀬上方言では次の16種類の子音音素を使い分けているように思う(弱気):

- (11) 瀬上方言の子音音素: ●/f/ [ɸ] ●/h/ [h] ●/p/ [p] ●/b/ [b] ●/t/ [t ~ ɾ] ●/d/ [d ~ n]  
 ●/k/ [k ~ g] ●/g/ [g ~ ŋ] ●/c/ [tɕ ~ dʒ ~ z] ●/s/ [s] ●/z/ [dʒ(/dʒ) ~ ʒ(/z)] ●/m/  
 [m] ●/n/ [n] ●/r/ [ɽ ~ ɾ] ●/j/ [j] ●/w/ [w]

(注1) /j, w/ はその他の子音とは音韻的特徴を異にしますが(詳細後述), ここでは子音に入れておきます。

(注2) /i/ の直前で規則的に生じる口蓋化異音は次のとおりです:

- /h/ [ç] ●/p/ [pʲ] ●/b/ [bʲ] ●/c/ [tɕ ~ dʒ ~ z] ●/k/ [kʲ] ●/g/ [gʲ] ●/s/ [ç] ●/z/ [dʒ ~ z]  
 ●/m/ [mʲ] ●/n/ [nʲ] ●/r/ [ɽʲ ~ ɾʲ]

調音点, 調音法の違いに基づいて(11)を整理すると, 表3のようになる:

表3 瀬上方言の子音体系

		唇音	舌頂音	舌背音	咽喉音
阻害音	閉鎖音	p b	t d	k g	
	破擦音		c	z	
	摩擦音	f	s		h
共鳴音	鼻音	m	n		
	弾き音		r		
	接近音	w		j	

【次回予告(次こそ)】

- (i) 音素 /f, h, p, b/ の条件異音 (ii) 半濁音化 /f, h → p/ (iii) 濁音化 /f, h → b/ (iv) 音素 /k, g/ の条件異音 (v) 濁音化 /k → g/

<sup>7</sup> 日本語式に表現すれば, 子音の数は, カ行, サ行, タ行などの「行」の数と同じです。